Time Canceller

パコパコ。。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｉｍｅ　Ｃａｎｃｅｌｌｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ８２６２Ｚ

【作者名】
パコパコ。。

【あらすじ】
今自分の置かれている世界に不満を持つ天才高校生の櫻井涼介。彼は１つの力を神から手に入れる。「タイムキャンセル」。それは５秒前の状態に時間を巻き戻す力だった。彼は持ち前の頭脳を活かして警察、国を相手に戦うことを決心する。腐った世の中を変える為に・・・。
この力は彼の人生にとって吉とでるのか凶とでるのか・・・。力を手にした時の涼介には知る由も無かった。

第一話～坂～（前書き）

初めてこういうの書きます。
文章は稚拙だけどよろしくお願いしますm（＿＿）m

第一話～坂～

暑い・・・

俺、櫻井涼介は坂を登りながらそんなことを考えていた。

とても急な坂だ。坂の上には俺の通う「最上学園」がある。

学園を坂の上に作るとかアホだろ・・・

体力の余りあるほうではない涼介にはこの坂は苦行でしかない。

今日は7月1日。もう少しで夏休みだ。

天気予報では今年1番の暑さかもしれないとか言ってたっけ・・・

続いて涼介はニュースの内容を思い出していた。

『横浜市青葉区で女の子が死体が発見されました。女の子は心臓を包丁で刺されており、警察はこの事件を青葉区での連続殺人事件と関係がある可能性が高いものとして捜査を進めるようです。』

狂っている。この世の中は狂っている。

カッコつけているわけではない。

これが俺の本心だった。

〈神様なんていない〉

涼介は最近こればかり考えている。
神様がいるとしたらこんな世の中になるはずがない。
神様なんて自分がどんな状況になっても絶対信仰しない。
これは涼介が自分に課しているルールだった。
いかんいかん、今はこんなことを考えるべきではない。
ちなみに今の時刻は８時３０分。
とっくに授業は始まってる。
だから俺以外に坂を登る奴は見当たらない。
はずだったのだが、
「おい」
声をかけられた。
顔を向けると、茶髪、そしてどこか物寂しそうな目をした男が立っている。
制服は俺と一緒だ。
だが知り合いではない。

「なんだ？」

と俺が言うと、

「どこかであったことないか？」

「ないと思うよ」

俺は即座にそう答えた。

「俺は大抵一度あった人のことは覚えている。あなたは会ったことはないな」

「そうか・・・悪い・・・」

そう言うと、男はまた悲しそうな顔をした。

「あなたはあの学校の生徒ですか？」

と聞かれた。

「いきなり口調変わりすぎだろ・・・」とか思いながら、

「そうだよ」

と答える。

「急がなくていいのですか？」

「同じ学年だろ。タメ語でいいよ」

「では失礼します。急がなくていいのか？」

「授業なんてどうでもいいからな」

制服は学年によって違う。
男の制服には袖に三つラインが入っている。
俺と同じ高３の生徒だ。

そういえば名前はなんていうんだろう。同じ学年なのに見たことがない。

「名前はなんていうんだ？」

「高倉浩平」

「ふーん。じゃあ、」

「着いたよ」

何時の間にかもう高校に着いていた。

「じゃあ、この辺で」

と浩平がいうので、

「いや、教室の方向は同じだろ」

と言うと、

「職員室に用があるんだ」

と言い、浩平は職員室の方へ駆けて行った。

第一話～坂～（後書き）

うん、面白くなるかな。。。。？w

第二話～教室～

教室の扉を開けると、

「せんせーーーーい！！涼介が遅刻してまーーーーーーーす！！」

真穂の奴うるさいな・・・

「涼介。成績が良ければ遅刻をしていいわけじゃあないんだぞ。早く席に着きなさい。」

「は～い」

俺はそういって自分の席に座った。

ちなみに俺の成績は学内、いや全国トップである。取りたくてとってしまうんだから困ったものだ。いや、別に困らないが・・・

（ねえねえなんで遅刻したの！？やっぱり勉強？それともこれ？）

小指を立てながら興味津々に聞いてくるこいつは真穂である。学内での成績は2番であり、意外と優秀。こう見えて真穂は俺が心を許せる数少ない友人の1人だ。

（まあ、そんなものだ）

テキトーにあしらって俺は寝ることにする。

（え！！！！！涼介にそんな人いたの！！！！嘘でしょ！！！！ねえね

ねねねえええええええ！！）

全くうるさい奴だ。ちなみに俺はバドミントン部の１人である。バドミントン部は今や４人しかいない。しかも全員高校三年生。要するに廃部の危機なのだ。部員は俺と真穂、そして

「せんせーーい！！涼介と真穂がうるさいでーーーす！！」

お調子者の恭弥だ。

なんで俺の周りはこういう奴しかいないんだ・・・

（恭弥の奴、あとでバドミントンでボコボコにしてやる）

「真穂、少し黙ってなさい。」

先生に注意された真穂は「ぐぬぬ・・・」とふてくされている。

それにしてもやっぱりなんか教室の雰囲気がピリピリしてるな。

期末試験前のシーズンでもあり、受験を控えている高校三年生の今である。考えてみれば当たり前のことなのかもしれない。

涼介の通う高校、最上学園は進学校であり、その実績は確かなものである。日本一難関と言われている大学に毎年１００人以上合格している。

だから俺とか真穂、恭弥みたいな空気を読めない人間はどこかみんなから敬遠されている、そんな気が俺はちょっと前からしていた。

実際、俺の遅刻にリアクションを起こす奴なんて真穂と恭弥しか今もいなかった。恭弥はちょっと違うか・・・

バドミントンの活動だって本来はすべきなのではないのだろう。でもみんなとてもは怖いのだ・・・。バドミントン部がこのままなくなってしまうのではないかって。

実は俺はバドミントンの存続に興味は余りない。ただ、そこで出会った3人の友人、彼ら彼女達だけはずっと大切にしようと思っていた。特にここ最近は本当にそう思う。

だってこの俺がこう思うだけのことが最近起きたんだから・・・

「大切な人」っていうのは失くしたときに本当に大切だと気が付くものだ。

涼介は何時の間にかぐっすりと眠りについていた。

第三話～夢～

「おいしいよ、母さん」

俺は母にそう言った。

「よかった。涼介の好きなハンバーグを作った甲斐があったわ」

今日は俺の誕生日。母は俺の為に腕によりをかけたハンバーグを作ってくれたのだ。正直お世辞にも形が整ってるとは言えないハンバーグ。

でもそのハンバーグは本当に美味しかった。

「私ね・・・」

母は言う。

「涼介を育ててきて本当に良かったと思っているの。成績は優秀だし、優しいし・・・。母さん誇りに思ってるわ」

「やめてくれよ母さん。成績がいいのはたまたまだよ。それに俺は優しくなんかない」

これは俺の本音だった。

「かーさん、私はーーーー！？」

「梨穂子のこともとっても誇りに思ってるわよ」

「お兄ちゃんばっかり褒めないでよねーーー」

梨穂子は俺の妹だ。中学2年生である。こういうのもなんだが、梨穂子は俺の自慢の妹だ。素直で、そして俺なんかよりずっと優しい。

俺はふとテレビの方へ視線を向けた。

『警察では、この殺人事件をこの地域で発生している連続殺人事件と関係があるものとして捜査を進めるようです』

「怖いわね・・・。梨穂子は絶対1人で出歩いちゃダメよ」

「分かってるよ〜。でもそんな怖い人がいたら、私が蹴散らしてあげる」

力強く梨穂子は言うが、

「無理だろうな。先週亡くなられたのは柔道経験者らしいしな」

「お兄ちゃんは真面目に返しすぎ〜」

「はは。そうだな」

我ながら平和な家庭である。

「そういえば今日父さんは？せっかく兄ちゃんの誕生日なのに〜」

「色々あるのよ、色々」

「ちぇっ、また仕事か～」

「しょうがないよ。父さんは忙しいんだ」

父さんは医者だ。外科医であることもあって、とても忙しいらしい。

出かける前に、

「涼介、本当にすまないな。お前の誕生日だというのに・・・この埋め合わせは絶対にする」

と言ってくれた。別に何とも思ってないのに・・・

ちなみに俺も医者を目指している。すでに医学の勉強もちょっとしており、父さんが時々教えてくれる。

「お前にはまだ早いだろう・・・」

半ば飽きれながらそういうのが父の口癖だった。

その後は梨穂子の学校での話をした。なんでも梨穂子の描いた絵がコンクールで入賞したらしい。

俺が「俺のも絵の才能があればなあ」と言おうとしたその時だった

突然テレビがついた

母と梨穂子は全く気にしていない

そしてなんと母がテレビ画面に映っていた。

あっ、と俺が言おうとしたその時だった。

「ごめんね・・・」

テレビ画面の中の母がそう言った。

第四話～屋上～

「ねえねえ起きて！！ねえってば！！」

真穂の声で目が覚めた。

なんだろう、なんか凄い嫌な夢を見ていた気がする。

「授業中こんなに爆睡してる生徒フツーはいないよ～？おかしいって、絶対。これで成績がいいんだからムカつくわよねー」

「よく言うよ。涼介の寝顔を携帯で撮って」

バシッ！！！！

恭弥が思い切り辞書で真穂に殴られた。

「いってえええええ！！絶対後で涼介に言ってやるからなあああああ！！」

「そんなことしたら絶対殺すからねえええええ！！」

顔を真っ赤にしながら真穂は辞書で恭弥をポカポカ殴る。

っていうか普通に痛そうだ・・・

「おい、ふざけてないで屋上に行くぞ。腹減ってから早く行こう」

真穂は渋々殴るのをやめる。

俺達は屋上に向かった。

屋上は俺らバドミントン部がいつも昼飯（弁当）を食べる場所である。俺ら以外に人がいることはまずない。

屋上に着くと、先客がいた。

「智恵！！待った～？」

真穂が聞くと

「・・・・少し」

とその先客は答えた。

この先客の名前は智恵（ちえ）。同じバドミントン部の一員だ。クラスが違うために、こうして昼飯を屋上でいつも一緒に食べている。

「ゴメンな～。ちょっと真穂の撮影会に付き合ってたら遅れ」

バコーン！！！！

京介が吹っ飛んでった。

っていうか真穂はいつも辞書をもっているのか・・・？

昼飯を食いながら、俺たちは他愛もない話をしていた。

「この間行ったコンビニの店員が超可愛かったんだよな～。もうち

ょいしたら告ろうかな～。」

「・・・・覚えてないと思う」

「そうよー。あんたのこと覚えてるわけないじゃない」

「みんな冷たいな～」

「大丈夫、俺は応援してるぞ恭弥」

いつも通り平和な昼が過ぎていく。

「なんか面白いことないかな～。なんかない、智恵？」

と真穂が聞くと、

智恵はしばらく考え込んだ後、

「・・・・転校生」

と答えた。

「転校生？高３の今頃になって転校生が来たのか？」

俺が尋ねると、智恵はコクリと頷いた。

「この時期に転校生か。確かに妙だな」

「名前はなんていうのよ？」

「・・・・高倉浩平」

あいつか・・・

俺はすぐ思い出した。学園の前の坂であった奴だ。そういえばなんか変な空気をまとっていたな。

俺も人のこと言えた義理じゃないが・・・

「でもそういうことならそいつと仲良くなりたいな～」

恭弥が言う。

「そうね、その子バドミントン部に入れちゃおうよ。もしイケメンだったら大歓迎だわ！！」

「お前には涼介が」

ドガーーーン！！！！！！

なんか恭弥が吹っ飛んでった。

っていうか本当に死なないだろうな・・・

「で、どんなやつだったの！？浩平君は！？」

と真穂が尋ねると智恵は顔を赤らめながら、

「・・・・イケメンだった」

と言った。

場が凍った

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8262z/

Time Canceller

2011年12月26日20時54分発行